

## 高校英語の有用性

小川 公代

高校で学んだ英語はプラクティカルな場面では役に立たないという人もいるが、本当にそうだろうか。私は多くのことを高校で学んだ。基礎的英語力を叩き込んでもらったのも高校生のときである。英文法は体系上、時制、助動詞、準動詞、関係詞、比較、仮定法などに分類されるかもしれないが、ネイティブと話していてこれらの知識が無用であると感じたことはない。

私は高校2年生からイギリスに留学させてもらったが、誰も *die* と *dead* がそれぞれ動詞と形容詞であること、そしてその用法も教えてくれなかったし、仮にイギリス人に説明してほしいと頼んだところで、彼らにそれをうまく説明することはできなかったらう。また、もし高校文法を勉強していなければ、「意志動詞」(*go*, *use* など)や「無意志動詞」(*rain*, *be* など)が何であるかを意識することはなかったと思う。意志、無意志動詞の違いを論理的に理解していれば、例えば助動詞 *can*, *may*, *must* の意味の捉え方も正確に把握することができる。上智大学英語学科は英語で授業を行うクラスが(英語、専門科目ともに)多いのだが、分詞構文は特にお世話になっている。私の専門は英文学と思想であるが、例えば歴史的人物の説明にはよく用いる表現である。「18世紀末の急進派思想家の1人でもある Thomas Paine は服地屋 (*draper*) であったが、精密な *measurement* (測定) を可能にする彼の技術と、近代社会を支える啓蒙思想、公正さ (*justice*) や平等 (*equality*) を訴える急進主義とは矛盾するものではなかった。」例えばこのような内容の説明を端的に行う場合、以下ようになる。

“Having been a draper himself, Thomas Paine was good at measuring. In this way, he was fair to his customers. Justice, fairness and equality, which were the key

concepts of the Enlightenment thought, had something in common with his interest in cutting fabric evenly.”

こういうふうな分詞構文を使うのが手っ取り早い。確かに、“Having lived in England for so long, I can't imagine living elsewhere.” など、初めて分詞構文が会話で使われたときは面食らったものだが、何度も聞いているうちに自然に聞こえてくるのだから不思議である。分詞構文が(難度が高いわりに)頻繁に会話に登場するのには、プラクティカルな理由もあるだろう。ひとつの例として、接続詞を入れた文と、分詞構文を用いる文を比較した場合、明らかに長さが異なる。

実際「こなれた英語」というのは英文法の難易度にかかわらず、ネイティブの日常会話に密着しているかどうかで判断される。隣近所の人と会話をしているだけなのに、時には高度な文法理解が求められる場合もある。『Listening Laboratory』執筆に際しては、もちろん高校生の文法レベルにあったものを心がけたが、なにより実践で使える英語をめざした。

英文法にとらわれすぎて「英語を話す」という行為に身が入らないのも困りものだが、私は大学教員として、英語力をネイティブのものに少しでも近づけたいという志がある学生には、高校英語の復習を勧めている。日本人が英語圏で高等教育を受けたり、仕事をしたりする環境では、やはり言葉の「精密さ」が求められるであろう。

(上智大学外国語学部英語学科講師)